
ボクはちょっとだけ音楽中毒

巻尾 音虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクはちよつとだけ音楽中毒

【Nコード】

N9039V

【作者名】

巻尾 音虎

【あらすじ】

沢木 雪幸^{ゆきゆき}15歳が、実家をでて東京の高校に通い、同じ趣味を持つ人物と出逢い、今まで趣味としてやってきたものに真剣に向き合ったり、学園生活でちよつとラブコメったりと……、まあそんな感じです。

一話 上京（前書き）

初めて書いてみました。
表現力皆無でした。

一話 上京

――4月1日。

僕はまだ重たいままの瞼をどうにか持ち上げ、
どうにか乗り過すごさずに目的の駅に到着した。

「ふう。着いたあゝ。」

約10時間、
ずっと電車の席に座ったままだったので、腰に蓄積されたダメージ
はかなりのものだった。

「この年で腰痛つて。」

と、ため息を吐きながら腰を撫でる。

なぜ僕が約10時間電車に乗って、ここ東京駅に立っているかとい
うと学校がこの東京にあるからだ。

――東京。

まさか自分がこんな都会の学校に通うことになるとは思わなかった。

ちなみに実家は長崎。

別に田舎とは思わないが、東京はまた違う気がする。

「しかし人が多いな。」

僕は思わず感じたままを口にしつつ、ポケットに手をつ込みケータイを開き、ある人物に電話をかける。3コール鳴る前に、聴き覚えのある甲高い声が、

『ユツキー！ 駅着いた？』

「ああ、ついさっき着いたところ。」

『じゃ、今から行くわってことで切るよ』

今から…？

まさかまだ家だったり？

駅まで少なくとも30分はかかると聞いているのだが…

「ちょ、ちょい待ち！！今どこに…！！」

居るんだ？と言いかけた時には通話は切れていた。

とりあえず腹が減ってきたので、駅の売店でよくある幕の内弁当を買った。

腰のダメージがまだなくなっていなかったから正直座りたくはなかったのだが、空腹には従うしかなく、すぐ近くのベンチに腰をかけ、割り箸を割った。

が、飲み物が欲しくなり、再び立ち上がり、急ぎ足で自動販売機に向かった。

買ったのは、お笑い芸人がCMをしているやつ。

ジョーなんたらなのなんとかマウンテンブレンドとかいうやつである。

さっきのベンチに戻ろうと踵を返すと誰かとぶつかった。

「うっ、いてて…」

声のした方には自分と同年くらいの少女が尻餅をついてた。

ちなみに、少女の外見を説明するとキレイというよりはかわいい印象で、目が少しつり上がっていて怒ってもかわいいタイプで、髪型は腰辺りまであるであろう長い髪をポニーテールにしている。

「あ、ごめん。大丈夫？」と、僕は手を伸ばしながら声をかけた。

「ひゃ、ひゃい！だいじょぶねす！」と、慌てた様子で僕の手を掴み立ち上がった。そして僕の手を離れた瞬間、またフラつき、その場に尻餅をついた。……全くもって大丈夫そうじゃない。

「ホント大丈夫？」

少女は一瞬ムツとした表情をし、しかしすぐ表情を戻して、

「だ、大丈夫ですって！じゃ、家に帰るんで。」

シユダダッつと擬音を口にしながら少女は走りだす。

僕はそんな少女に向けて駅の雑音が鳴る中で叫んでみる。

「あのさー！」

少女は振り返らずに、

「なによ〜！急いでるんだから！」

「なんでもいいんだけど〜！どうして来た道戻ってんの〜？」

僕が大声で叫んだせいで少女は、注目されてしまっていた。少女は急停止して俯いてこちらに向かって早歩きで戻ってきた。

「……………」

少女は沈黙。

「え、えーっと、あのきつと疲れてるんだよ。」

「……………」

僕は一度コホンッと咳払いをして言った。

「あの〜…。怒ってらっしゃる？」

その刹那ブチッという音が聴こえた気がした。

そして少女は笑顔でこちらを見てきた。

カワイイ笑顔に思わずニヤニヤしてしまいそうだった。

そしてその笑顔を崩さず、明るい声でこう言った。

「ここでクイズ！今このホームにいる大勢の人の前で恥をかかされた私に、喜怒哀楽の怒以外があるとお思いでしょうか？」

もはやクイズではないじゃん！っと思う前に、問答無用で脛に蹴りがクリーンヒット。っか笑ってたよなさっきの！嘘笑いなのアレ？

「あばよ、そこでしばらく悶え苦しんどけ。」

「オイ、ちよっ理不尽過ぎでしょー！ってか最初と人格変わりすぎだろ、お前誰だよって感じだよ！」

少女は笑顔で振り返り、

「じゃあね、ずっとそこで苦しんでね！」

「口調カワイイふうになってるけど、内容がさっきより酷くなってる気が……」

少女は走っていった。

カワイイと思ったが、とんだ激突系二重人格理不尽女だった。

少女が走っていったほうを見ると、50m先に倒れている人影があった。

それはついさっきまで目の前にいた少女だった。

駆け寄ると、

「なんかないの？」

と倒れているさっきの少女が聞いてきた。

「はっ？」

と、不意をつかれた僕はつい、なんかって？という感じで聞き返してしまふ。

「ごっは〜ん〜！」

と少女はたったの三文字にこれでもかというほどの苛立ちを込めながら大声で叫んだ。

「えっ？」

キョトンとしている僕に、少女は『はっ？何なのコイツ？これくらい察しなさいよ！』と言わんばかりの表情を向けてくる。

そして、

——ぐう〜。

ちよっと恥ずかしそうに頬を赤らめ、こちらから目を逸らして少女はこつと言つ。

「で、なんかないの？」

—— 30分たったが連絡も来ない。

今僕はベンチに座っている。

そして隣には、さっきの少女が座り、僕と同じ弁当を女子にはそぐ

で呼ぶとか!」

「そっちこそ初対面にしてはものすごく図々しいと思っけど。」

「どこが?」

「僕に弁当とジュースおごらせたうえ、名前のほう呼んだだけでキ
しるとか?」

「ちっちゃい男ね。雪幸は。」

「あ、今そっちも名前ですの上呼び捨てで呼んだ!」

「女から呼ぶ場合はいいのよ!ってか、どう?どうせアンタはクラ
スで女子から名字にさん付けで、距離のある呼びかたしかされたこ
とないでしょ!」

——うっ、当たってる!?

「だから、なにか?」

「うれしいかしら？かわいい女子に名前を呼び捨てで呼ばれて」

「お前ってすごいな。」

「どういう意味よ！」

「まあ、それはとりあえず置いて。」

「流すな！」

「ところで、そろそろ遅い時間だけど帰らなくていいの？」

と、話を逸らすため、さつきから考えていたことを聞いてみる。

「あ…、もうこんな時間か…。バイバイ！」

竜子は腕時計を見て立ち上がり、走って去っていった。

「つーかアイツはまだ着かないのか…」電話をかけた相手、そして我が従姉妹の明があれからずっと待っているがなかなか来ない。どうしようかと考えていると

「おーい！ユッキー！」

聞き覚えのある甲高い声が聴こえた。

「アキ。遅い…。」

「いやはや、道が混んでおりまして。申し訳ない！」

「そうだったのか。じゃあ、まあ良いや！」

「ははあゝ、お許しいただきありがたき幸せですうゝ！」

そう言つてアキは地べたではあゝと土下座のような形になっていた。

「アキ、とりあえずその土下座やめて、周りの人が『あゝ、あの男の人彼女に土下座させてるわ』って感じでこっち見てるから！」
僕は慌ててアキの手をとって立ち上がらせた。

「えっ、そうなの？私たちって周りから見るとラブラブカップルに見えるのかなあゝ（*＜―＞*）」

何故かアキは、うきやーとか言つて超喜んでいた。

「なんでラブラブが勝手に付け足されてるんだよ！それとさっきの状況から誰もラブラブだとは思わないだろ！ってかさ、なんで嬉しそうなんだよ？」

と、若干の照れを隠しながら訊いてみる。

「そりゃ、ユツキーのことが…好き…だからだよ。」
と、アキは顔を赤くしながら言った。

「いやいや、」冗談を

「わたしはいつでも本気だよ！ユツキー！」

「そう言われても…。」

「ユツキーはわたしのことキライ？」

「いんや、キライじゃないけど？」

「じゃあわたしのこと……好き？」

隣を見ると今までに見たことなく真剣で、それでいて今まで見たことないかわい表情のアキがいた。

それなのに僕は真正面からそのセリフに答えられなかった。

「けど僕らいと同じ士だし……。」

チツチツチツ！と指を振り、アキは急に顔を近づけてきて、

「ユツキー、知らないの？いとこ同士でも結婚できるんだよ？」

それはわかった！わかったけど、顔が近すぎるって！息とか当たってるし、アキのぱっちりな瞳がすぐ近くで覗いていて吸い込まれてしまいそうだった。

「ん、ユツキー！ユツキー！？固まっちゃってどうしたの？」

「……」

「ムフフ。さすがに近くてドキドキしちゃったかなユツキー？私もドキドキしてるよ（*^^*）……ユツキー？はっ、もしか！私とするあんなことやこんなこと……！そんなことまで！妄想してたり」

「……ハッ、ち、違う。も、妄想なんてしてない!」

「否定から入るあたり、凶星っぽいにゃ〜!」

ムフフ、と猫のように口の形を変えて笑っていた。

「本当違っつてば!」

僕は一生懸命否定する。

「そつか。今日から一緒に暮らすんだし、二人でゲームするとかセッションするとか…、楽しみにしてたんだけど……」

「あんなことやこんなこと!そんなことまで!ってゲームとかセッションのことかよ!」

「なんだと思ってたの?……えっ、まさか!? ユツキーは、えっちなこと妄想しちゃってたり?」

「ち、違っ!」

「本当にゃ〜?」

アキはニヤニヤしながら聞いてくる。

「違うつてば！」

「ま、ユツキーになら、そういう妄想されても良いけどね」

それに、と付け加えて

「あんなことやこんなことって、私もそういう意味で言っただし」

「……………」

アキは嬉しそうな笑顔を浮かべ、

「よかった！妄想しててもしてなくても、…………ドキドキは…………してくれたいだし……！」

「…………まあ、…………ドキドキはしたけどさ……。」

「むふふ、…………まあ、…………ドキドキはしたけど、さ……。」（笑）

それからしばらくアキは、僕を見るとそのたびニヤニヤしている。

それをやめてくれと言っても言うことを聞かないので、諦めてその

まま歩くことにした。

駅から出てすぐのところ、車に止まってあり、そのすぐ横に女性が立っていた。

「やあ、雪くん！久しぶりだね〜！」

大人の女性という落ち着いた感じのある感じの深い音色と、エネルギッシュでエキセントリックな感じが混ざった声がこちらに向かって飛んできた。

「かなえ叔母さん。お久しぶりです。これからお世話になります！」

「ああ、よろしく！」

叔母さんはグッと親指をたてて言った。

アキと一緒に車に乗ろうとしたら、叔母さんが左腕で行く手を遮り、

「しかーし、条件があるのだ！」

「かなえ叔母さん、何ですか？」

「そのおばさん言うのを、やめてくれないかしら。」

「じゃあ何て呼べば良いんですか？」

「うん…そうね…。普通にかなえさんで！」

「分かりました！かなえさん、今日からよろしくお願いします！」

「よしよし、じゃあ乗って！」

「こうして4月1日が終わっていった。

一話 上京（後書き）

キャラ名は結構考えました。とにかく普通じゃないのにしようと思っ
て…。

さらに、主人公はあだ名をつけやすくと思い、雪幸とつけてみたわけですが考えてみると、この名前からつけられるあだ名ってユツキーくらいしか無いんですね。

ちなみにこの名前の由来については少し後に出てきます。

次は雪幸や、アキや、かなえさんの暮らし家庭についての話、竜子さんの暮らしの話、そして新キャラの登場です。

新キャラについてですが、本当は1話にも出るはずだったメインキャラの1人です。

二話 4月1日 あさ

——4月1日AM7:30

水族館でマンボウを見ているとなぜか急に腹にズシツとした重みを感じた。

なんだろう？と思いながらもマンボウを見続けていると次は、チュンチュンとスズメの鳴き声のような音が聴こえ始めた。

それから5秒くらいたった時、よいしょと聴こえてきて、さすがの僕もいま目にしているのが夢で、誰かが起こしに来ているのだろうということがわかった。

が、起きる気にはならなかったので夢の世界に頑張つて居座つてみる。

そうしているとまた腹に重みが乗ってきた。

——よし、スイッチ入った。

というセリフが聴こえた直後、ヴォーンという重低音が耳元で聴こえてきて、

「誰だー！朝っぱらからアンプ使つてベース弾いてるヤツはー！」

飛び起きた。流れで朝から大声でツッコんでしまった。

ベースの音を生で聴いたことがない人はわからないだろうが半端じゃないのだ。すると目の前には同い年の少女の顔があった。

「近いよ…。ゆつきいゝ。ふわあああ…」

と、ふんわりとした口調で言つてあくびをしていた。

「そつか。東京に着いたんだった。」

「そうだよ、ゆっきいのねぼすけさん！」

「クルミかぁ。ひさしぶりだね。」

「せえゝいかあゝい！ホントひさゝしぶりだね。」

「しかし、さつきは心臓止まるかと思ったぞ！」

「あははは、ごめんね。」

クルミの悪気の無い笑顔により、びつくりさせられ不満だった気持ちはどこかへ消え去ってしまった。

この笑顔には、大抵のことを許してしまえる不思議な力があるのだ。

「ゆっきい、朝ご飯出来てるから早くきてね。」

「ん、りょーかい！」

「ではゆっきい、しばしの別れだよ！」

という捨てセリフを残し、クルミは自分の部屋へと戻っていった。

——しばしって数分もしないうちに会うじゃん。

口調はふんわりでおとなしいのに、時々エキセントリック。変わった人物だと思う。趣味でベースをやっていて、2年くらいになる。

ボクはパジャマから、たいして変わらない部屋着に着替えて部屋を出る。1階のリビングにはもうすでに3人が机を囲んでいた。アキとクルミとかなえさんの3人だ。

ちなみにアキとクルミは双子で、顔の造りが似ているので喋り方や髪型で見分ける。

アキは、肩くらいまでの長さでいつもちよつとだけ髪の手がはねている。

クルミは、基本形が腰あたりまでのストレート。

しかし、しょっちゅう髪型を変えるのだ。ポニーテール、ツインテール、サイドテール、お団子、etc…、どうやら趣味らしい。毎日変わる。

アキとクルミが同じ髪型にしたときがあり、本当にどっちがどっちか分からなかった。

父親は10年前から行方不明だそうだ。なぜかは聞いたことがない。というか聞きづらくて聞けない！

「おはよう。雪くん！ほら早く冷めないうちに」

「はい！いただきます！」

「うん。はい！じゃなくて、うん！でいいよ。」

かなえさんは笑顔でそう言う。

「けれど、お世話になってる身ですし…」

「これからは、ここが雪くんちなんだから、もっとリラックスしていいんだよ」

「ありがとうございます。」

「またかしまった言い方しちゃって。」

「ごめんなさい。」

「だから、なさいは要らないんだよ。」

「ごめん。」

「うん、それでよし！」

食卓には目玉焼きと野菜サラダと一杯の白米が並んでいて、想像以上に普通だった。

別に朝食のメニューにケチをつけているわけではない。

イメージと結構違っていたからそう思っただけで、別にもっとボリ
ュームがあつたほうがいいか思っているわけじゃ……ないんだか
らな！

——ピンポーン

家のインターホンが鳴った。

「どうやら着いたようだね。雪くんも来て。」

と、かなえさんが言う。

「……？ 何でボクも？」

「何でって……、雪くんの荷物だし……。」

「ボクの……？」

「なに？ 記憶喪失にでもなったの？」

「なつてねーよ！」

「あ……。まだ寝ぼけてるのかぁ。」

と、かなえさんは『なるほど』という仕草した。

「あなたの娘さんのおかげで目はバッチリ覚めてますよ！」

「素直にありがとを言えないゆっきい、かわいい♪」
と、クルミが入ってくる。それに

「かわいい♪」

と、かなえさんののつかってくる。しかし次の瞬間ハッとわれにか
えり、

「ギターよ！ギター！……ギ・タ・ー！！」

「すっかり忘れてた…」

「いやいや、普通忘れないでしょう！」
と、かなえさんがツツコミをいれる。

「いや、最近ギター触れてなかったし…」
と反論してみる。

だからって、とかなえさんが言おうとしたが、インターホンが鳴り
やまなくなってきたので、かなえさんは急いで玄関に向かった。

僕が食事を続けようとしていると、

「いまでもあのレスポール使ってるの？」とアキが聞いてくる。

「うん。あの音が今でも好きでな」

「確かお父さんが使ってたギターなんだよね?」

「そう。だから、あんまり自分のって感じしないんだよねあ。」

「あのギターって結構高いんだよね?」

「そこまでもない。20万くらいだったかな。」

「20万くらいかあ。たいしたことないねえ。」
と、クルミが言う。

「いや、全然たいしたことあるからね!」
と、アキが焦ったように言う。

「そうか?」

「そお?」

と、ボクとクルミは一度顔を見合わせた後、アキのほづをもつ一度見てそう言った。

「そうなの!」

「100万するやつ結構あるし」

「そういうのはプロが買うの。わたしら庶民としては、20万は普通に高い部類に入るの!」

「へへ」

「まったく…」

と、アキは呆れ果てていた。

ようやくかなえさんが戻ってきた。

「ギターは雪くんの部屋に置いておいたよ。」

「ありがとう！かなえさん。」

「You're welcome!」

と言つて、かなえさんは親指をたてる。

「なぜに英語？」

「英語教師だもんね」

と、クルミが答えてくれたが、だからといって英語が出てくることの説明にはならないと思う。

「さてそろそろ修行しようかな」と

と、アキが言う。

「修行つて？」

と、ボクが聞く。

「決まってるじゃん！練習だよ、練習！」

「何の？」

「そりゃ、アキは…」

とクルミが言いかけたところで、

「私はドラマーだし、ドラムの練習に決まってるじゃん！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9039v/>

ボクはちょっとだけ音楽中毒

2011年11月21日07時00分発行